

米国の国立公園における自然資源管理

環境省自然環境局自然環境計画課 鈴木 渉

二年間の米国研修

平成一五年三月二十九日から平成一七年三月二十八日までの二年間、(独)国際協力機構の「海外長期研修員制度」により、米国の国立公園局及び魚類野生生物局において研修する機会を得た。研修の目的は、先進的な米国の自然資源管理の手法、及び自然資源管理分野における途上国への技術移転に関する米国の手法を学ぶことであった。勤務地は、ケンタッキー州のマンモスレイプ国立公園、カリフォルニア州のレッドウッド国立州立公園、及びワシントンDCの魚類野生生物局国際課である(図参照)。

ついで、「国立公園」二〇〇三年一月号に記事を掲載している。レッドウッドについては、また改めて紹介したいと考えている。

研修のねらい

この米国研修のねらいは、国立公園の現場で勤務しながら、米国の公園管理の現状を学ぶことであった。米国で初めて提唱され、国立公園という形で実現化した「保護と利用の両立」は果たして実現可能なものなのか、米国には日本の公園の抱える問題の解決策があるのではないかと意気込んでみたもののなかなか糸口がつかめなかった。そこで、さまざまな関係者に直接お会いし、インタビュウを行なうことから始めることにした。研修期間中行なったインタビュウは六〇回を超え、概要

をとりまとめたメモは、A4用紙で一七一ページにもなった。研修の報告書の骨子は、基本的にこのインタビュウの内容を基に組み立てたものである。

研修生活の日常

公園での日常はなかなか忙しかった。朝五時半頃起床して弁当を準備し、朝食をとって事務所へかける。フィールドワークが主体だったため、一八カ月間の国立公園における研修の間、スズメバチやマダニに何度も刺されながらの勤務となった。私と妻は公園内のボランティア宿舎に滞在していたために、それぞれ週四〇時間の勤務義務がある。こうして、大学時代は数学専攻で虫が大嫌いな妻も、ボランティアとして勤務する



図 米国内研修位置図

ことになった。(さらに妻は、ゴミを捨てに行った際にクマに遭遇したり、野外作業中にエルクに追いかけられたりもしている) 研修開始当初、言葉の不自由な日本人が、そもそもどれだけ公園の役に立てるのか不安であった。実際、ビジターセンターでの勤務

や環境教育は条件が厳しく、受け入れてもらえなかった。ところが、マンモスレイプ国立公園の「Science and Resource Management」という聞き慣れない部署に受け入れてもらえることになった。この業務は、公園内の動植物、文化財などの調査、モニタリング、管理行為(外来生物駆除など)などであり、意思疎通ができれば語学能力や専門知識は問われない。また、このフィールドワークを主体とす

る業務は、まさに私の希望していたような勤務先でもあった。虫嫌いの妻には申し訳ないが、フィールドワークを主体とする業務に従事することができたおかげで、大変充実した研修となった。さらに、この日本の国立公園管理組織では未だに確立できていないこの業務こそ、米国の国立公園と一般国民および公園内の各部署をつなぐ重要なツールであると考え、私の研修報告の大きな柱の一つとしても取上げている。

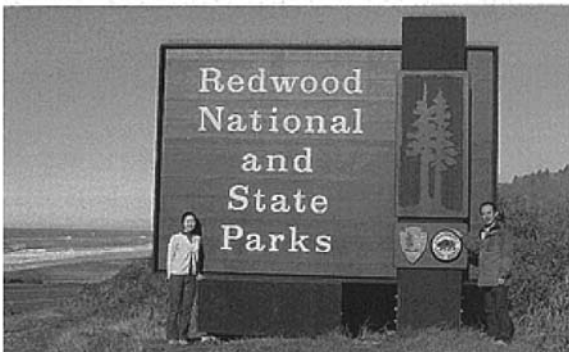
米国の国立公園の魅力

米国では、公園を一度も訪れたことがない子供ですら、「国立公園は私たちのもの」という意識を持っているという印象を受ける。インタビュウの中でも、「国立公園は現在も国民の宝であり、次世代に残していかなければならないもの」という国民の合意のようなものが形成されている、というお話をしばしば伺った。大統領選挙でも、国立公園をいかに魅力あるものとして守っていくか、ということが争点の一つにあげられる。このように、国立公園が一般国民からの強い支持を受けていること、またそのための努力を管理者側が怠らなかつたことが、米国の国立公園の魅力は今も変わらないものとして

園を訪れるだけでは味わうことのできない楽しさと充実感が、公園のボランティアプログラムなどを通して提供され、それによりこのような「家族」の裾野が、国民の間にもかなりの規模で広がっているようである。ちなみに、ボランティアはVIP (Volunteer-in-Parksの頭文字) と呼ばれ、大切に扱われている。

研修を終えて

二年間の研修を通じて痛感したことは、日本の国立公園制度はまったくと言っていいほど異なるにもかかわらず、両者の抱える問題は驚くほど似ているということである。ライフスタイル、価値観の多様化などにより国立公園の訪問者数は次第に減少している。また、公園利用者に占める裕福な高齢者の割合が増える一方で、家族での国立公園利用が減少し、将来を担う子供達の自然体験の機会が失われている。



2番目の研修地であるレッドウッドに到着 (2004年1月)

また、驚くべきことに、私たちはこの部署で結構重宝がられた。米国人は一般に個性的な字を書く人が多く、かつ記載方法などが個人によりまちまちなこと、折角の記録が無駄になることも多い。このため、暗算が速く字(ほとんどは数字)が読みやすい妻は記録係として引っぱりだことなった。また、調査用具を手入れしたり、その日のうちにデータを整理したり、充電電池を充電しておいたりといった平均的な日本人の行動様式が、「二人は言葉をうまく話せないが、役には立つよう

さらに、国立公園で働く職員には強い連帯感があり、インターン、ボランティア、NGOなども含め、公園の管理に携わる人たちは公園の「家族 (family)」の一員とみなされている。ビジターとして公

次号から掲載される記事により、こうした米国における国立公園管理の状況や、注目すべき取り組みについてお伝えしたいと考えている。